毎日歌壇

加藤　治郎　選

せつないをうまく言えないはなびらが蟹歩きしてゆくひるのそら　垂水市　岩元　秀人

〈評〉桜の花びらがカニのように横向きに流れていったのだ。歌に詠まれてきた桜の美意識への挑戦である。ちょっとせつない。

さっきのと同じかどうかわからない猫がだんだん近づいてくる　大津市　佐々木敦史

〈評〉同じ猫かどうかは問わない。認識の問題を提起している。哲学的な作品だ。

シルバーのファーストピアスあけるとき赤くなるまで耳冷やすきみ　名古屋市　森本　有

アメリカはロシアのディールに負けておりウクライナ戦はまだ続きそう　川崎市　佐久間喜資

夫婦別姓の議論が流れてる　立ち食いそばの小さなテレビ　東京　新井　将

君の眼の夜の水面に花冷えが幽かに満ちて前線はしばらく停滞するでしょう　宮古島市　塩見　佯

この夢はもうすぐ醒めてしまうからもう一度だけ名前を呼んで　四万十市　佐竹　紫円

つぎつぎと嘔吐する亀　ああそうか真実に耐えきれなくなって　雲南市　熱田　俊月

地球で独裁者増え宇宙から隕石迫る日やオムツ交換　須崎市　野中　泰佑

パンプスのヒールはたった三センチ君より低いわたしでいたい　札幌市　住吉和歌子

水原　紫苑　選

暴力を見せられている感覚で月を見ていた死んだオオカミ　神戸市　入間しゅか

〈評〉オオカミは月の暴力、光の暴力、美の暴力に耐えかねて去ったのかもしれない。詩人ではなく、詩である存在の痛み。

インベンション旋律は徐々に崩される信仰をする／される間で　横浜市　砂月　七

〈評〉バッハのインベンションの言いがたい力。信仰をめぐる力にも似て。

自転する星の淋しさどの街も桜吹雪に侵されてゆく　千葉市　芍　薬

生きてゆく体あるいは死んでゆく体　交わる風のさみどり　雲南市　熱田　俊月

息つぎの仕方をどうか忘れたい水面に映るひかりはきれい　宮古島市　塩見　佯

ふらふらな文字は大気に舞うんだね皮膚の上からいつも離れて　岡山市　松井　度

花吹雪　不意に全てが過去になることが救いのような気がする　東京　遠野　鈴

落とされた枝の数だけ乳房のようなふくらみ持つプラタナス　東京　文野やよい

星たちはみんな鍵穴銀色のたましい持って細く佇む　東京　石川　真琴

のびのびと巻かない自由を謳歌して優しい味の白菜の芽よ　山口市　平野　充好

伊藤　一彦　選

日本で起こりしことと大抵の人は思はずガザウクライナ　長崎市　田中　正和

〈評〉爆撃を受けて命を奪われる人々。第二次大戦下の日本人がそうだったと作者は思う。そして今戦場で命が危険な人たちを。

どの人も受けいれてゆくカフェの椅子支えるだけの献身がある　東京　石川　真琴

〈評〉誰も拒まず安らぎを与えてくれる椅子。こんな「献身」を理想と考える作者。

何気ない言葉に勝手に傷つけるやわらかすぎる心捨てたい　相模原市　榎本　ハナ

説明がきちんとできた日はすこし肩が四角くなるからほぐす　取手市　奥山いずみ

生きる意味とか分らないけど矛盾すら愛せたら及第点か　川崎市　水　面

裂帛の一本締めがぼくは好きゆるい三三七拍子より　倉敷市　中路　修平

次々と新入生に並ばれて立て看板は背筋を伸ばす　宮崎市　門田　藍子

ポンポンを振って出てくる子どもたちみんなたんぽぽゆれてたんぽぽ　横浜市　友常　甘酢

遠くより案じてくれし祖母、母の思ひのごとく咲く山桜　山口市　塩見　昌子

どうしても牧水が来る朝夕の窓の向こうの山ざくら花　東京　風ノ　桂馬

米川千嘉子　選

五歳児にゃんわり肩を揉まれてるリストラの世を生きて来し夫　高崎市　樋浦マサエ

〈評〉リストラの波をかいくぐって頑張った夫の苦労を幼い手が慰めてくれたらしい。そう思う作者の夫への視線が優しい。

雛一羽起こさぬように　手のひらでレモンケーキはすやすや眠る　長岡市　三月　とあ

〈評〉ヒヨコを飼っているのだろうか。レモンケーキが楽しく、やわらかい。

くたびれたコートのように脱ぎ捨てようわかってくれるという幻想は　京都市　高橋よしこ

失踪をする時もスマホを持って結局わたしはひとを愛してる　川崎市　二宮　珊瑚

ガザの死者は日本の地方都市ひとつ消えてゆく人の数になりたり　盛岡市　内藤　賢一

骨折せし脚を引き摺り落馬させし騎手に寄りゆく馬いぢらしき　吹田市　鈴木　基充

内定がとれぬと泣いた氷河期の娘思い出す孫の就活　富士宮市　渡辺佐知子

五十年経って電話をかけてみた彼はいきなり「エース久保田か？」　守谷市　久保田洋二

「フォロワーは二人の息子」ブログする一人暮らしの隣人の笑み　大阪市　岡田マチ子

遙かなるあの万博に月の石人間洗濯機スイスのアイス　上田市　矢島　美穂

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます